

山岳部から：バイブレイション

著者	坂本，篤美
雑誌名	龍南
巻	2 1 0
ページ	8 6 - 8 7
発行年	1929-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2298/6892

河越。吉田。田中。小野（哲）。森本。山口。徳永。苦米地。上野。井上。菊池。濱田。高村。太田。岩崎。嘉納。野村。石黒井上（）。安瀨。丸田。丸吉。

我々は今少時でシーズンアップをせねばならぬ。我々は二學期の初まる日を待とう。胸高なり肉躍る秋の高専大會の晴の第一日を待とう、それ迄が忍苦の時なのだ。

——ラグビー部の一兵卒——

山岳部から

坂本篤美

文藝部の人から御依頼を受けたので、こゝに山男の拙文を出させて頂く。

山岳部ほど、其性質として Popular なもので同時に全龍南人から其の存在を漠然と意識せられてゐたものは無かつた今でも時々「山岳部は部として立派に龍南會の中に存在してゐるのですか」といふ問ひを受けて驚く事がある。それは次の諸點の如く、部の性質として万止むを得ないといふ事は諸君首肯される事と思ふ。

(一) 試合及び試合の爲めの遠征等が無いこと。

— (六) —

(二) 他の部の如く、毎日集まつて練習其他を行はざる事。

(三) 休日を利用するが故に部の登山及其他の行事は一般龍南人に知られざる事。

(四) 活動する所が遠隔僻地なるが故に世人の眼にもよくは入らない事。

(五) 其の行ふ所が一瞬にして敵と争ふといふ如き所謂「狂的」なものでない事。

然し又よく考へて見ると、我部程龍南人に取つて加入し易いものはなからう。他の部とちがつて我部は勿論名義上では約三十名の部員を擁してゐるが實際に於ては全龍南人の部であり、全龍南人が部員であるわけである。此の點は我部の誇るべき特色であると思ふ。實際の所、他の部の部員も又一般龍南人も有志の者は遠慮なくやつて來て我部の部品を借出すし我部も喜んで之に應じ、出来るだけ我部は一般龍南人の部であるといふ特色を發揮させたいと思つてゐるのである。

それから我部に對し一般龍南人が或は考へてゐるであらう所のことの誤解である事其他、及び全龍南人に對する我部からの御願ひを書かせて頂きたい。

それは我々が最近知つた事であり同時に我々が最も遺憾に思つた事であるが、龍南人のある一部から「山岳部の者のやる仕

事、即ち一般に、所謂「キヤムピング」なるものはブルジョア階級の餘技であり、贅澤である。之に對して立派に龍南會の一部として、多くないと雖も豫算を與へるのは適當である。」との叫びが起つたことがあつた事を云ふのである。此の叫びは勿論消極的なものに過ぎなかつた、即ちある個人の意見に過ぎなかつたのであるが我々に取つては之は極めて遺憾事である。

しそれはキヤムピングを知らない者の叫びとして無理もない事だと思つてゐる。なんとすれば實際私も部に入る前は山岳部といふのは、快樂的な部だといふ感情を持つてゐたからである。

そして、今日私がキヤムプ生活が決して單に快樂的なものではないといふ考へを持つようになったのと同様に、一般龍南人も若し一年間でも我部に於て生活する時は私と同じ氣持がするだらうと思ふ。キヤムピングはブルジョアの余技なりとは、かの米國の富豪連中が自動車走らせてピクニック的のキヤムピングをするのを言ふ言葉であつて我々には少くともあてはまらない事を斷言する。我々の山行は生活である。朝もあれば晝もあり、晩もある。一瞬間の勝敗を争はない。此の點に於て、乘馬會の黒石に於ける生活と類似する。我々の對象とする所は自然であるが故に山行の強弱、即ち健脚の如何は問題でない。むしろ

る山行に依つて得られる健脚は副産物である。此の意味に於て我部の中にも健脚ならざる者が少くないしもそれは嘲笑の焦點とはならぬ。よく部員外の者が「山岳部の者と一緒に行くと足が速いからすぐにへばつてしまつて後に残される」といふ者があるが我々はそれを笑止に思ふ。部員外の者で部員よりも健脚な者は少くないからである。

そこで今度は全龍南人に對する御願ひであるが之は單に我部を大いに利用して下さる事と山に關する參考知識があつたらどん／＼知らせて頂きたいといふ事に止めておく。要するに以上の事を單に辯解でなく、眞面目な考へから全龍南人に御報告する。

童話會

會員 郷農孝之

兒童の好きな者の集ひ、幼い後輩等に對する限らない愛の上に成立つた童話會が、やがて滿三年の誕生を迎へる。じみではあるがたゆみない會員の努力と、切な時代の要求とは生れて間もない此の會を、よく今日迄伸ばしてきた。現在改築のため中